

『鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月』

江戸後期の読本。五編二九冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。前編は文化4年(1807)刊。源為朝を主人公として、為朝伝説を縦横に利用し、「保元物語」「太平記」などの古典、中国の「水滸後伝」「五虎平西全伝」「照世盃」等の構想と趣向を生かした伝奇小説で、九州、京都、伊豆七島、琉球を舞台に、雄大な構成で波乱に富む筋を展開させた。「椿説」は珍説で、フィクションを意味し、為朝のながされた大島の椿と、九州の鎮西に通じさせ、「弓張月」は為朝が弓の名人であるところからの命名。

少納言信西と争った為朝は父為義に九州に下され、八町礫紀平治(はっちょうつぶてのきへいじ)を家来に、阿曾忠国の女の白縫姫を妻にする。保元の乱には上京して崇徳院に味方し、敗れて伊豆大島に流され、代官の女簾江(ささらえ)を妻にして再起を待つ。官軍に攻められて脱出し、讃岐で新院の霊に逢い、九州に渡り白縫姫と再会、舜天丸(すてまる)をもうけ、上京の途次台風に逢い琉球に漂着する。白縫姫の霊の乗り移った王女を妻として琉球の内乱の平定を助ける。平定の後、舜天丸が王位に着き、王女は死に、為朝は登仙して去る。史上不遇の英雄を歴史の成功者に仕立てて、大衆の判官(ほうがん)びいきの心情に訴えた。馬琴長編の第一作であり、『南総里見八犬伝』と並ぶ代表作である。

[参考文献]

馬琴椿説弓張月の世界：半月の陰を追う / 朝倉瑠嶺子著：八木書店，2010.2
913.56/あさ 2010100918

椿説弓張月 / 高藤武馬訳：筑摩書房，1960 918/15/27 0000424956

“椿説弓張月ちんせつゆみはりづき”，国史大辞典，JapanKnowledge，
<http://japanknowledge.com>，(参照 2014-10-25)

弓張月①

新院憤死神(タマシイ)を魔界に投ず

崇徳院(1119-1164)は平安期の天皇で、保元の乱に敗れて讃岐国に流刑に処される。その不遇な生涯から、古来名高い怨霊として知られる。もと、院号は讃岐院であったが、のちに鎌倉幕府の怨霊慰撫の意向によって崇徳院と改めた。怨霊化の詳細は中世軍記の『保元物語』に描かれている。五部の大乘経を書写して、せめてそれだけでも都近くに安置してもらおうとしたが叶わず、舌先を食い切った血で日本国の大悪魔になることを誓った。ついに生きながら天狗になり、茶毘の煙は都に流れていったという。その後、崇徳院の怨霊伝説は中近世の説話・物語・芸能・絵画などさまざまなジャンルの題材となっていく。江戸後期の上田秋成『雨月物語』収録「白峰」はよく知られているところである。この場面は為朝の妻白縫が、崇徳院の念願成就の瞬間に立ち会い、院がまさに天狗になった瞬間を描いている。白縫は必死に院を止めるが、院は聞き入れず、白縫と為朝の守護神になることを約束する。この後、度々為朝は崇徳院による天狗の助けを受けることとなる。新院(崇徳院)は立ち上がって経机を高くもちあげ、なにやら呪文を唱えだされたのである。そして、その間に次々に、たくさんの写経を海の上へばらばらと投げられたのであった。そうすると、にわかに一陣の風が吹き来て、海上に激浪が立ちさわぎだしたが、その中に、くじらが潮をふきあげるように潮しぶきが立ちのぼったのである。一道の黒気が玉体をおおい隠した。はげしい雷光がきらめきわたった。みると、雲間に新院のお姿らしいものが隠見しつつ遠ざかっていくのであった。——ああ、新院はすでに天狗道におはいりになったのであろうかと、白縫は呆然として雲のゆくえを伏し拜んでいたのである。

[参考文献]

椿説弓張月 / 高藤武馬訳 : 筑摩書房, 1960 918/15/27 0000424956 p. 84-85

日本怪異妖怪大事典 / 小松和彦 [ほか] 編集委員 : 東京堂出版, 2013.7

388.1/Ko61 2013109836

弓張月②

讃岐院の冥助 為朝の船を行る

為朝が肥後国から、平清盛を討つために船で京都に向かうが、嵐にあい白縫や二十余人の郎党を失ってしまう。為朝は悲観して切腹しようとするが、そのとき突如として電光がひらめきわたって、黒雲が一面におりてきた。そして見なれない異形の天狗どもが為朝の船に乗り移ってきて、水あかを汲み出したり、舵をとったりしていそがしげに働き出したのである。今まで傾きかかっていた船が正常に復して、矢をいるような速力で走り出した。天狗どもは口をそろえてこんなことを大声で言っていた。

「われらは讃岐院の神勅をうけてやってきた。為朝よ、軽々しく死を急いではなるまい」

[参考文献]

椿説弓張月 / 高藤武馬訳：筑摩書房，1960 918/15/27 0000424956
p. 177-178

弓張月③

雲根 雛を殺して 熊鷲と闘う

琉球にわたった為朝は佞臣利勇に、人に害をなす大鷲を退治するように命じられる。山では大きな熊が小熊を連れて出てきた。熊は谷川のほとりの岩を抱きあげて、その下にいるサワガニを小熊に食べさせるのであった。熊は抱えていた岩を取り落してしまい、カニをあさっていた小熊は岩の下敷きになって血を吐いて死んでしまった。親熊はあわてて岩を取りのけたが、小熊はぺちゃんこにひしがれて板のようになっていた。熊は自分が小熊を殺したとは気がつかないらしく、左を見たり右を見たりして、小熊の命を奪ったものを探し求めているふうであった。そのとき、さっと風の鳴る音がして風の鳴る音がして大鷲が岩の上に降りてきた。熊の倍ぐらいもある大鷲でクチバシから尾先までの長さは十尺にもあまるほどであった。熊は眼前の大鷲を睨んで、これが小熊の命を奪ったものと思ったのであろうか、憤然としておどりがかかっていった。熊は鷲の胸元へ爪をかけて引き裂こうとした。鷲は熊の向こうずねをつかんで鉄のようなクチバシで突きさした。たがいになり下になり、死力を尽くしての一騎打ちとなった。鷲は羽を引き裂かれ、熊はノを突き破られ、二つとも鮮血に染まって死んでしまった。為朝は労せず鷲と熊二頭を得ることができた。

[参考文献]

椿説弓張月 / 高藤武馬訳：筑摩書房，1960 918/15/27 0000424956
p. 279-280

弓張月④

為朝 三度 矇雲を破る

琉球の王を殺し実権を奪った幻術使いの妖僧濛雲と、為朝との戦いが始まる。為朝は、幻術を使って種々の怪異を現ずるときは、獣の血とか人糞のごときものを注ぎかければたちまちその術が敗れるとして、そのような汚物を桶にたくわえて陣中に備えつけていた。戦いが始まると濛雲空中の一角におかたてさしまねいた。すると、たちまちむらむらと一段の黒雲がまい下りてきた。そしてその中から異形の人馬が無数に立ち現われて、目覚ましい働きを did した。これを見て、かねて用意してあった汚物を長柄のヒサゴに汲みとって、あたりかまわずめちゃくちゃにぶちまけさせた。効果てきめん、あやしげな人馬はばらばらと地上に落下した。よくよくこれを見ると、あるものは青紙を切って兵士の形にしたものであり、あるものは藁をつかねて馬に形どったものであった。

[参考文献]

椿説弓張月 / 高藤武馬訳：筑摩書房，1960 918/15/27 0000424956
p. 309-312

弓張月⑤

諸神の擁護によって 矇雲頭を授く

一度は矇雲に敗れて退却した為朝だったが、生き別れていた息子舜天丸、腹心の家来八町礫紀平治と再会し、矇雲に再び戦いを挑む。どのような攻撃も弾き返す矇雲だったが、舜天丸が神仙から教えられて作った桃の矢をひきしぼり、神に祈念した。すると、二羽の白鳩が舞い降りてきて、旗竿の上にとまり、鶴の鳴く声が聞こえてきた。矢を放つと、流れ星のようにするすると矇雲のノド笛深くつきささった。為朝が首を切っておとすと、一天にわかにかき曇って、盆をくつがえすように大雨が降ってきた。みんなで矇雲の死骸を取りまいて見ると、もとより人間ではなくて、その長さ五六丈ばかりの虬竜(みずちのたつ)であった。半輪の月をうちかさねたような鱗が全身を覆い、大船のいかりのような爪が手足に生えている。眼はらんと鏡のごとく、口は血を盛る盆のように真っ赤である。からだは堅く、鉄の柱のようであった。

[参考文献]

椿説弓張月 / 高藤武馬訳：筑摩書房，1960 918/15/27 0000424956
p. 376-377